

現代青年における友人関係と自己愛傾向の関連性

—志向性からのアプローチ—

0707051

佐々木 太郎

【目的】

個人と他者との関係から、個性化と社会化、内的適応と外的適応、自己意識と他者意識など青年期には様々な問題が同時に生じ、それらは相反する対極的なものではなく、相互作用的に影響し合い、共存しながら統合されていくべきものである。伊藤（1993）は、適応の一形態を発達的にとらえた社会化・個性化理論に基づき、二律背反的な社会と個人との関連から人格形成過程を解明するために、個人志向性・社会志向性という概念を提起している。

宮下（1995）によると、友人は青年にとって自己形成に多大な影響力を持った存在であり、互いを必要とする友人との深い関わりが青年の発達において重要となるとされる。また、近年、自己愛傾向が現代青年の特徴の1つとして、その傾向が強くなってきているとされる（小塩、1998a）。友人関係が自分らしさの感覚を持つことに影響することから、自己愛傾向についても影響を与えていると予想される。

以上のことから、青年期において、友人とは自分らしさを確立するための重要な存在であり、友人関係は現代青年の特徴の1つである自己愛傾向との関連が強いと考えられるため、本研究では個性化・社会化という適応の観点から、個人志向性・社会志向性という2つの方向性によって友人関係と自己愛傾向それぞれの特徴と双方の関連性を検討することを目的とする。

また、友人関係と自己愛傾向の関連性については斉数（2002）によって検討されているが、分析の手順に不備があったため、それを正した上で検討することとする。

【方法】

北海道内の私立大学の学生 175 名（男性 79 名、女性 96 名）を対象に、講義時間内を利用して一斉に質問紙調査を実施した。調査時期は 2010 年 11 月上旬である。質問紙は、①個人志向性・社会志向性 PN 尺度（伊藤 1993, 1995）、

②友人関係尺度（岡田 1999）、③自己愛人格目録短縮版（小塩 1998b, 1999）からなる。また、使用する項目数が多すぎるため、斉数（2002）の研究の因子分析で得られた各因子の.500 以上の因子負荷量を持つ項目のみを使用することとした。①～③とも回答は「当てはまらない」（1点）～「当てはまる」（5点）の5件法で測定を行なった。

【結果と考察】

現代青年において、社会志向性が高い者は友人に対して心の支えになろうとし、友人と内面的な相互扶助的な関係を築こうとしていることが示唆された。また、友人に対して自己防衛意識を持つことで友人関係を維持していることも示唆された。一方、個人志向性が高い者は、個性を尊重し、より主体的に行動することを志向することで、積極的に自己主張をしていることが示唆された。また、より自己に意識を向けることで、他者からの評価を必要とせず、内面的に自己評価をするようになるため自己肯定感や自尊感情を獲得しやすいと考えられる。

このように、個人志向性は自己愛傾向と、社会志向性は友人関係との関連が示唆された。しかし、これらはどちらかに偏ったものではなく、2 志向性の適応的な側面が相補的に働くことで友人関係を良好なものにし、適度な自己防衛意識は他者との協調性を高め、その関係の中での自己主張性がより自分らしくいることや自己の尊重につながると考えられる。そして、このように友人関係の中で自己主張し、他者からの評価を得ることは、内省を促し、自己を深めるきっかけとなり、自己愛傾向を高めると考えられる。つまり、2 志向性の高まりが友人関係と自己愛傾向の関連性を強めるということが示唆された。

（指導教員 豊村 和真 教授）